

男女ともに幸せに生きるために

～身近になった社会の問題や取り組みについて考える～



最終変更3/13

*黄色枠で書いてある部分は著者🐧

グレー枠で書いてある部分は著者🦈

が記述しています

オレンジ枠部分は米津先生に学んで作成した部分です。

目次)、 () の部分もページ数入れる

表紙	p01
目次	p02
1. なぜ今ジェンダーを考えるのか	p03
2. 探究までの活動について	p07

- 1) 探究までの過程
- 2) 特別講義を聞いて

- (1) 佐藤さやかさん
- (2) 佐野優子さん



3. 探究活動	p34
1) 探究活動1 googleフォームでのアンケート結果について	
2) アンケート結果	
3) アンケート結果をもとにした探求	
(1) 生きづらさについて	
(2) 家事、出産、育児について	
4) 探究活動2 より深い考察へ	
(1) 女性の進学について	
(2) 女性の結婚について	
(3) 服装や化粧について	
4. 私たちの考えるジェンダーの未来	p106
5. 授業モデルの提示	p110

1.なぜ今ジェンダーを考えるのか

- ①ジェンダーを考える必要性について
- ②理科教員がジェンダーを取り扱う理由について
- ③女性が抱く生きづらさの原因について

①ジェンダーを考える必要性

順位	国	日本のジェンダーギャップ指数	
1	アイスランド	146ヶ国中 125位	
2	ノルウェー		
3	フィンランド		
4	ニュージーランド		
5	スウェーデン		
6	ドイツ		
7	ニカラグア		
8	ナミビア	政治	138位
9	リトアニア	経済	123位
10	ベルギー		
15	イギリス	教育	47位
18	スペイン		
30	カナダ		
40	フランス	健康	59位
43	アメリカ		
105	韓国	世界の男女平等実現にかかる時間	
107	中国	総合	131年
124	モルディブ		
125	日本	政治	162年
126	ヨルダン	経済	169年
127	インド		
146	アフガニスタン		

日本のジェンダーギャップ指数は世界146ヶ国中125位でまだまだ男女差が大きい。

ジェンダー教育が重要である理由の1つに、人間の固定観念は幼少期～青年期に土台が形成されることが挙げられる。この時期に、男女を尊重できるような教育を提供することは、個人が自由に生きる社会を形成するために大きな効果を及ぼす。ランキング上位の北欧諸国では服装の自由や、男女の区別に縛られないおもちゃのデザインなど、**「男だから」「女だから」という固定観念を生まないための工夫がされている。***

*ジェンダー教育とは？質の高い教育に向けた海外や日本の現状を知ろう！
<https://naruhodosdgs.jp/gender-education/>

②理科教員がなぜジェンダーを取り扱うのか？

- 理系では男女の比率に差があることや、これから大学進学や就職など人生を考える上でさまざまな弊害があると考えられる。そのため、男女格差について考える必要がある。
- 進路選択の中で自身のキャリアなどについて考える機会が多くなると考える。高校生にとって身近な理系出身の女性として理科教員がこの話題を取り上げる事が必要であると考えられる。

③女性が抱く生きづらさの原因について

- 女性である事で**生きづらさ**
- 家庭、職場、学校、地域
- **専門家を導入**する事についても考える
- 男女の問題に対する**感じ方の差**についても考える
- 男性の生きづらさを解消する事で女性の生きづらさを解消するという方向でも考える。

2. 探究までの活動について

1) 探求までの過程

(1) 探求、学習の循環

① 探求、学習の循環 イラスト

② 探求、学習の循環 説明

(2) ジェンダーにおける社会の変化

① ジェンダーにおける社会の変化 イラスト

② ジェンダーにおける社会の変化 説明

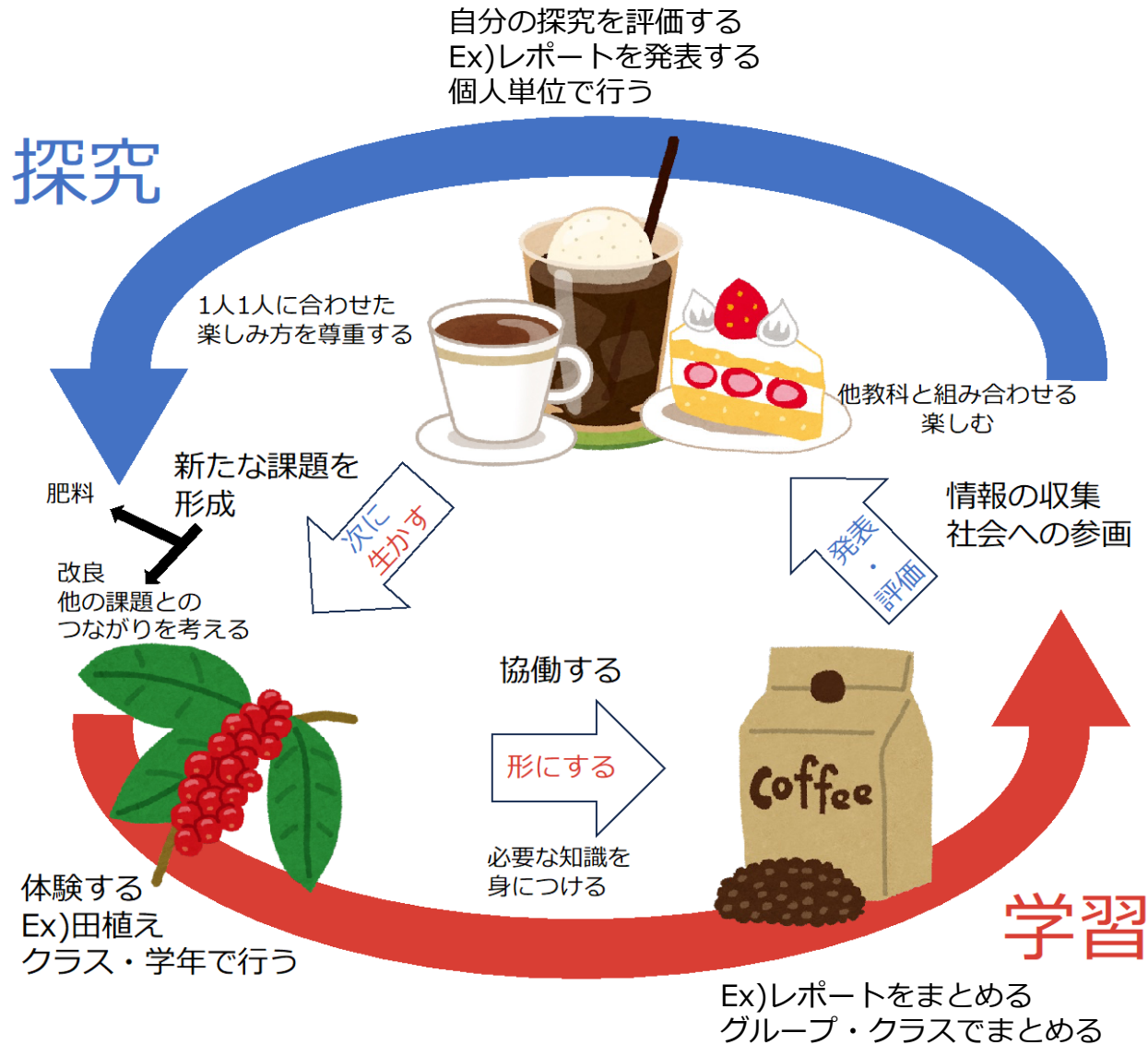
(3) テーマ、活動目標の設定

① テーマ、活動目標の設定 イラスト

② テーマ、活動目標の設定 説明

(4) 探求活動の相互関係について

(1)①探求、学習の循環イラスト



②探求、学習の循環 説明

- 私達は総合的な学習、探究を循環しているものだと捉えたため前項のような図を作成した。私達のチーム名がコーヒーである為、コーヒーを題材に学習と探究の循環を表した。
- コーヒーを育てる過程は学年やクラスなど大きな括りで行う活動である。これは小学校の総合学習で行った田植えなど体験に基づく学習からイメージを得た。次に収穫したコーヒーを販売する形にする。この時コーヒーを焙煎する技術が必要になったり、他の人と協力する必要があると考えたのでコーヒーの木と商品の間に関係をつなぐ矢印を書き加えた。
- また、この商品となったコーヒーを市場に流通させる中で必要なプレゼン能力や資料を作る能力が必要だと考えたためコーヒーを実際に飲むまでの間に矢印を書き加えた。最後液体のコーヒーにはさまざまな楽しみ方（アイスやホット）があったりケーキなど他の食品との組み合わせ方を楽しんだりするものであることを他教科との組み合わせや一人一人に合わせた探究と重ね合わせた。
- 作成したコーヒーの味を評価してさらに美味しいコーヒーを産むために改良をしたりコーヒーをドリップした後のカスが肥料になったりすると考えたため木に戻っていく矢印と違う方向へと進む矢印を書いた
- 学習がコーヒーを形にするまでを学習、コーヒーの販売からその後を探求と考えた。

(2)①ジェンダーにおける社会の変化 イラスト

社会はこう変化している！

<昔>

- ・結婚したら仕事を辞める
- ・男は仕事/女は家事
- ・女の人クリスマスケーキ
- ・共働き世帯<片働き世帯

<今>

- ・結婚・出産後も働ける
- ・男の人家事をすることが増えた
- ・職業の呼び方の変化
- ・共働き世帯>片働き世帯

○結婚年齢の男女差 減

男女の差が埋まってきている

これからの社会での女性の在り方とは？

私たちはこう考える！

- ・長く仕事を続けることができる社会が欲しい
- ・性別に左右されず昇進したい・稼ぎたい
- ・女の人幸せに左右されずに生きたい(結婚など)
- ・進学に関する男女差をなくしたい
- ・家事を強要されたくない

学校はこう変化している！

<昔>

- リボン/ネクタイ
- スカート/ズボン
- ランドセル女の子は赤
- 男の子は黒

出席番号は男女別

大学進学率の男女差

<今>

- ネクタイ/ズボン自由
- 家庭科/技術両方受ける
- ~さん呼び
- 共学の高校の増加
- ランドセルの色自由

<未来>

- 制服の統一化
- 分離選択の男女差 減
- 教育者の離職率(結婚・出産などによる) 減
- 水着の統一

昇進しにくい社会構造
固定観念
女はこういうもの
上の年代の上司

②ジェンダーにおける社会の変化 説明

- 今後児童生徒に予測困難な社会を生き抜く力が求められている。
- 社会の変化とは一体何を指すのかについて考察を行った後学校として対応が遅れている課題からジェンダーを取り上げた。
- 社会の変化に児童生徒は敏感に反応を示す為教員になる私達は社会の変化、価値観の変化に敏感である必要があると思うのでこの課題(今まさに変化が大きく起こっている課題)を探求の対象として取り上げた。

(3)①テーマ、活動目標の設定 イラスト

テーマ

社会の変化と学校について女性目線で考える

テーマの説明

女性に対する社会問題が多く割話題となっている。この様な社会の変化に対して学校も変化する必要がある。

調査内容

- ・女性として社会で働く・出産することに対してどのような障害があるのかを聞く。
- ・女性であることに対して否定的な意見のみではなく、肯定的な意見を取り入れたい。
- ・家庭内での性差について表面的に現れにくいいため家庭に対して調査を行う。
- ・男性だから家事をしない。女性であるから家事をしているのではないことをこの調査を通して示したい。

授業内容

単元：

社会の変化・個人としての変化を自分目線・社会目線で考える。その中で自身が所属している学校・家庭でどのような取り組みを行うことができるのかについて考える。

本時の授業：データからどのような男女格差があるのか理解する。また、自身の性に対して生きづらさを考える。

グループで共有し、発表する。

次回以降授業への展開：グループを作り、ジェンダーへの意識調査や抱える生きづらさについての調査計画を立てる。

探究のゴール

探究を通して男性・女性両者がお互いに尊重し合う関係を築く。

社会制度等自身を取り巻く制度や構造としての問題点等に対して考察を行う。

自身の将来を考える中で障害となる要素になること、助けになる情報を手にする。

女性として生きること、男性として生きることに対してそれまでよりも深く考える・探究を行う

探究方法

男女共同参画白書・女性活躍推進法

話を聞く(佐野優子さん・佐藤さやかさん・身近な人たち)

②テーマ、活動目標の設定 解説

- 前項に示すスライドの作成において探求のテーマを社会の変化と学校について女性目線で考えるとした。
- このテーマについての探求を行うために調査内容と探求のゴール、探求方法を記載し、総合的な探求の授業として高校生に対して授業を行うために授業内容を記載した。

(4)探求の過程の相互関係について

- まずp8に示した図を作成する中で探求と学習について考えを深めた。
- 次に社会の変化について考えを巡らせた結果社会の変化にジェンダーという視点で学校は追いついていないのではないかという考えが出た。
- そこでジェンダーにおける社会の変化と学校の変化についてp9で示したように探求を進めることを検討した。

2)特別講義を聞いて

(1)佐藤さやかさんに聞いた新しい発見

- ①女性である事が原因の業務内容・評価の差
育休・産休の取りづらさについて
- ②世代間・地域間のジェンダーに対する捉え方の差について
- ③男性が感じる育児に対する生きづらさについて
- ④子育ての環境の変化について
- ⑤感想

(2)佐野優子さんに聞いた新しい発見

- ①出産・育児前後の周囲と自身の変化による葛藤について
- ②効率的な働き方は男女の生きづらさ解消につながる？
- ③産休・育休からの復帰について/育児の中で得る事ができるスキルについて
- ④これからの社会における育休・産休のあり方について
- ⑤感想

(3)インタビュー内容について比較を行った。

内容を本文に反映させる

(1)佐藤さやかさんに聞いた 新しい発見

1. 女性であることが原因で、**職場で業務内容の差があつたり期待され評価される行動に差があつた、産休/育休を取得することが会社の風土によって難しいことにより年齢的な制限のみではなく、社会的に出産に対して制限が生まれていることがわかつた。**
2. 世代によってジェンダーに対する捉え方が異なると考えていたが、**地域差もあることがわかつた。**
3. **男性にも生きにくさがあることがわかつた。**
4. **家庭の中で子育てをすることが求められている中での対応の困難さについても学ぶことができた。**



①佐藤さやかさんに聞いた



- 男性職場出会ったことから、女性が働きながら子供を育てることに対して立場の違いから想像が及ばないことがある(専業主婦の妻を持つ/未婚)
- 子供の発熱等で休みにくい
- 育休に対しても特別扱いであると表現された。
- 仕事の評価に女性であるというバイアスがかかっているように感じた。
- 社会的な出産に対する制限について
→育休や産休の制度があっても第一子、第二子の間に期間の差等があることで会社内での立場等を考えるとやめざるをえないことがある

②佐藤さやかさんに聞いた2

- 世代間のジェンダーについての差がある

→自身の子供が子育てをすることになったことで共働き世帯等についての理解が深まった。

同世代の人たちは思っていると言わないことが多い??

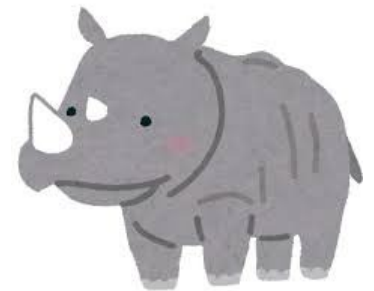
地域差によるジェンダー格差について

→広島県で作成された子育てハンドブック



③佐藤さやかさんに聞いた3

- 男性が育児休暇を取ることにに対して会社や社会として対応を取ることができていない。
- 男性が育児休暇や子供の急病に対応することに対して発信することが難しい。
- 女性はこうあるべきとされている社会では男性も生きづらさを感じると思った。



④佐藤さやかさんに聞いた4

- 子育て時にかかる負担が保護者(両親)に大きくかかってしまうことがわかった。
- 両親で対応する事が可能な範囲には限界があり両親以外のサポートに頼る事が大切になる事がわかった。
- 子供を育てる環境が変化している事を感じた。
- **このスライドの内容はこのままで良かったか微妙**



⑤佐藤さやかさん感想

- ジェンダーに対する意識の改革が行われている現代においてステレオタイプな考え方が個々まで残っている事に驚いた。
- 少子化の過程で身近に小さい子供を持つ親が少ない事も両親のみでの育児に拍車をかけているのではないかと考えた。
- 世代間でのジェンダーギャップ以外に地域観でも問題意識が異なる事にも驚いた。

⑤佐藤さやかさん感想

- 男性が多い職場では女性であることで頑張っても評価してもらえず、さまざまな人脈を作りながら試行錯誤していかなくてはならないということを知り、驚いた。
- まだ男女差別を感じたことがないので、社会に出てみないとわからない、当事者になってみないとわからないということを知った。

2)佐野優子さんに聞いた

1. 女性であることによる差別を感じたことはなく、
周囲は優しくだったが、それまでとのギャップに対しての辛さがあった。
2. 従来の仕事の仕方がそもそも非効率で頑張りすぎている
→**効率よく、つらくならない仕事のあり方を探究**
3. 身体を壊さないよう段階的に仕事復帰をしたり、
臨機応変な職場が大切
4. 誰かにしわ寄せをするのではなく、**皆が少しずつ負担することが健全であるのではないか**

佐野優子さんに聞いた1



- 出産育児に対する優しさについて

→休んでも良いよ、そこにいてくれるだけでいいよという周囲の優しさ、他の会社と比較して良い待遇にも関わらず不完全燃焼感がある

- 以前の自身との差について

→以前と比較して責任のある役職につけなくなる、休んでも大丈夫な仕事しか受けることができなくなる、同期入社した男性社員との差に羨ましさを感じる。

佐野優子さんに聞いた2

- 従来の男性を中心とした働き方に辛さがあるのではないかと感じる。
(残業や営業をするために社外に多く出向くなど)
- 効率よく、必要な事に時間を割く様な働き方を探究
- 無駄の多い頑張り→効率的に仕事を行い
充実した私生活を送る



佐野優子さんに聞いた3

- 長く産休、育休をしていると仕事への復帰が難しくなる為、長期間にわたって完全に職場から離れるのではなく時短勤務等で自身の体調が崩れないよう徐々に復帰する事が望ましい。
- 臨機応変に対応する事ができる環境がある事が大切だが、。
- 出産・育児を体験する中で、客観的に物事を見れるようになったり、人間として成長するという事を聞いてその様な人材を手放しているのはとてももったいないし、社会としてサポートをより充実させるべきであると感じた。



佐野優子さんに聞いた 4

- 産休・育休を取る社員が居る中で、会社として利益を出し続ける事はとても厳しい。
- だが、女性社員が産休、育休をおえて戻ってこない事はより厳しい。
- 会社に産休、育休を取れるだけの余裕があることが求められる。
- これまで全て女性にしわ寄せが行っていた部分を全員で少しずつ我慢するという考え方が印象的であった。

佐野優子さん感想1

- これまで女性に偏っていた負担を社会全体で補うという視点が新しく興味深かった。
- 出産育児に限定して今回は話を聞いたが、このように会社に誰が休んでも回る会社では怪我や病気で等々、社を一時的に離れる人が出ても対応ができる為会社としてのリスク管理にもなるのではないかと考えた。
- 男性の作り上げた政治や管理職になりたいわけではないという意見がとても印象的だった。
- 男性の生きづらさについても言及があったが、残業が多かったり、仕事量がかさんだりしている現在の働き方は男女ともに大変であると感じた。
- 今後すべての人が幸せに生きる為にも社会全体で効率的な仕事を考える必要があると考えた。

佐野優子さん感想2

- 社会で女の方が苦しくなっているのは差別があるからという考え方ではなく、男の方が頑張りすぎているからという考え方もあることを学んだ。女の方が大変である社会は男の方も大変であることを学んだ。
- 産休や育休から復帰してきた人は視野が広がり、より頼もしくなることを知り、出産や育児で離職するのではなく、休暇をとるということを社会全体に広げていくべきだと思った。

佐藤さんと佐野さんの比較について

- 職場等の環境による育児や出産に対するサポートが大きく異なる事がわかった。
- 女性が生きづらい社会は男性も生きづらさを抱えている社会であり、偏見の多いコミュニティで生きる事が困難さに繋がると感じた。
- また、佐藤さんの例では育児の負担が佐藤さんに集中しているのに対し佐野さんでは会社等が積極的に育児に協力している点が異なると感じた。



3.探求活動

1) 探求活動1

- ①探求内容を定めるにあたって
- ②探求のテーマの決定
- ③探求の方法について
- ④アンケート方法について
- ⑤アンケート内容について
- ⑥アンケート回答者について
- ⑦アンケート結果の取り扱いについて

探究内容を定めるにあたって

少子化を求めた家族と女性のリアリティを読んで

- この章を読む中で、社会が出産育児を行っている女性に対してどの様なサポートをしているか興味を持った。
 - 社会として意識の変化はあるのか(育児は夫婦で行うものである等)気になった。
- グーグルフォームの質問内容等に影響
- 親となる学習の中で、他者の成長に自己実現を重ねるという表現があった。男性が親になる中ではこの様な感情を持つのか気になった。

2)探究内容を定めるにあたって

少子化を求めた家族と女性のリアリティを読んで

- 地域の中での母親の数が減少している事で、子育てをしている人とのコミュニティに入る事が難しくなっている。**
- 社会が女性の労働力を求めているにもかかわらず、子育ての責任は母親に強いられるという構造が変化していない。**
- 晩婚化、働きながら子育てをする女性の増加により、若い母親、専業主婦となった女性が生きづらさを抱える。**

コラムより

- 女性が自己実現する事ができる社会**にはまだなっていない
- 女性が子育てをしながら働く事ができる社会を推奨しているが、まず、社会全体で子育てをする環境を整えるべき**

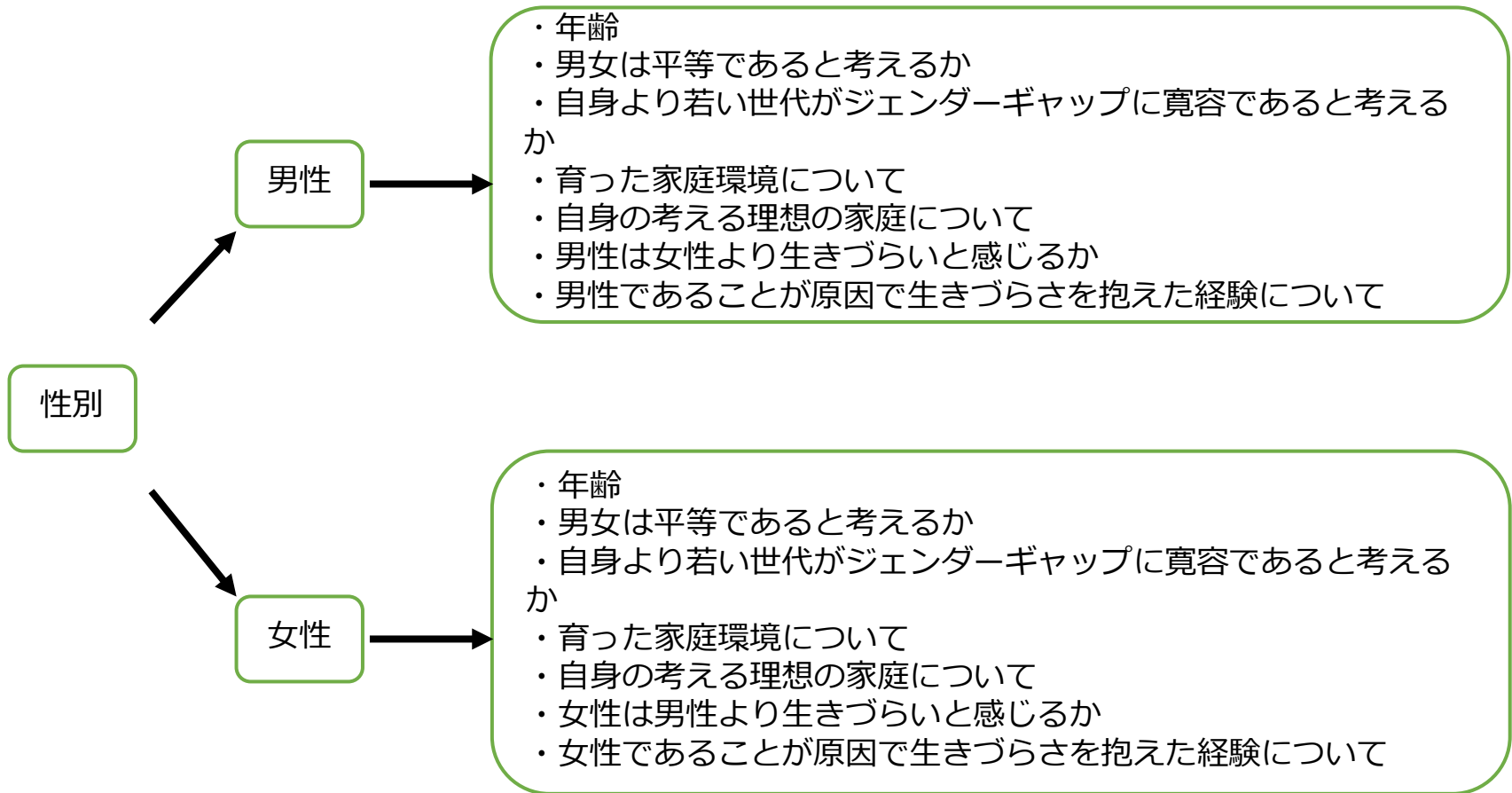
実際に探究を行った。

- ジェンダーについての話題を考える中で、女性の生きづらさの原因はなにかという疑問が湧いた。
- **生きづらさの原因**と、女性が生きづらさを感じる原因として主要なものであると考えた出産育児の過程について考察を深めたいと考え、実際に探究を行った。
- 教材研究、実際に高校生が行う探究の体験どちらの意味も兼ねる

アンケート方法について

- グーグルフォームを用いてアンケートを実施した。
- アンケート結果を男女別、世代別に分けて考察を行った。
- また、派生する事象等についても文献を読む、身近な人に追加で質問をする等して考察を深めた。
- このアンケート調査は母数が少なく、回答者がジェンダーに関心を持っている人が多いと考えられるため、あくまでも参考として考察を行った。

グーグルフォームを用いた調査について



アンケート調査

- 調査結果

LINE、Instagram、X(旧Twitter)を利用し、
googleフォームでアンケートを取った。

女性58名、男性22名

20代からは52名、50代からは24名が回答を行った。

母数が異なる為世代間差については割合を用いてグラフを作成した。



Google form 回答者について

- アンケート要旨を伏せた状態でアンケートを取ったため回答者の普段のジェンダーに対する意識に偏りは無いと考える。
- 世代間で回答者数にばらつきが出た理由としてはアンケート作成者の年齢が20代でありアンケートの配布時に年代間の差ができたためであると考え
- 性別間でも回答者数にばらつきが生じたが、これも世代間差と同様でアンケート作成者が女性である事から、アンケート配布可能な人に性別差が生じたと考え

Google formアンケート結果の扱いについて

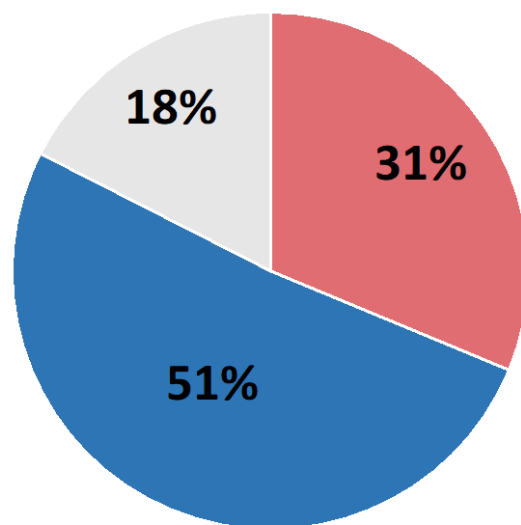
- 今回アンケートに回答してくださった方の人数が少なかったため統計的処理はせずに人数の割合によって比較を行った。
- 世代間差、性別差の両方で回答者数に偏りがあったことから人数の比較ではなく回答の割合による比較を行った。

Google formの結果について

- 男女は平等であると考えてるか
- 自身より若い世代がジェンダーギャップに寛容であると考えてるか
- 育った家庭環境について
- 自身の考える理想の家庭について
- 男女別生きづらさについて
- どちらの性が生きづらさをより感じているかについて
- 女性であることが原因で生きづらさを抱えた経験について
- 男性であることが原因で生きづらさを抱えた経験について

男女は平等なのか？

男女は平等か (全体)

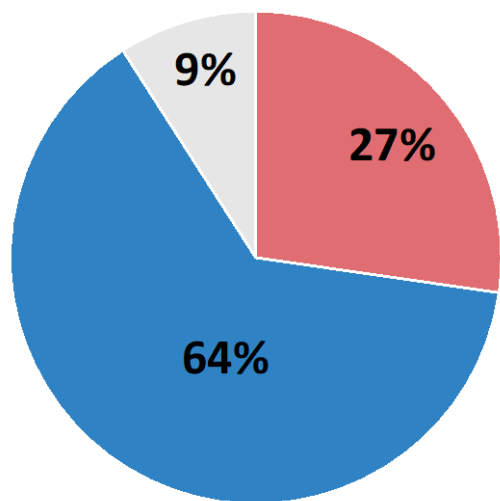


■ はい ■ いいえ ■ どちらでもない

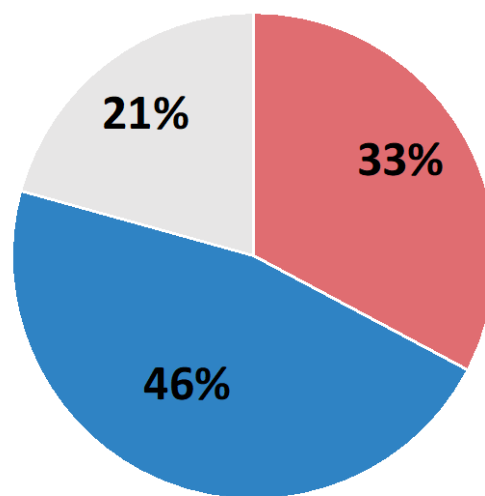
約半分の人が平等でないと感じていた。

男女は平等なのか？(性別ごと)

男女は平等か (男性)



男女は平等か (女性)

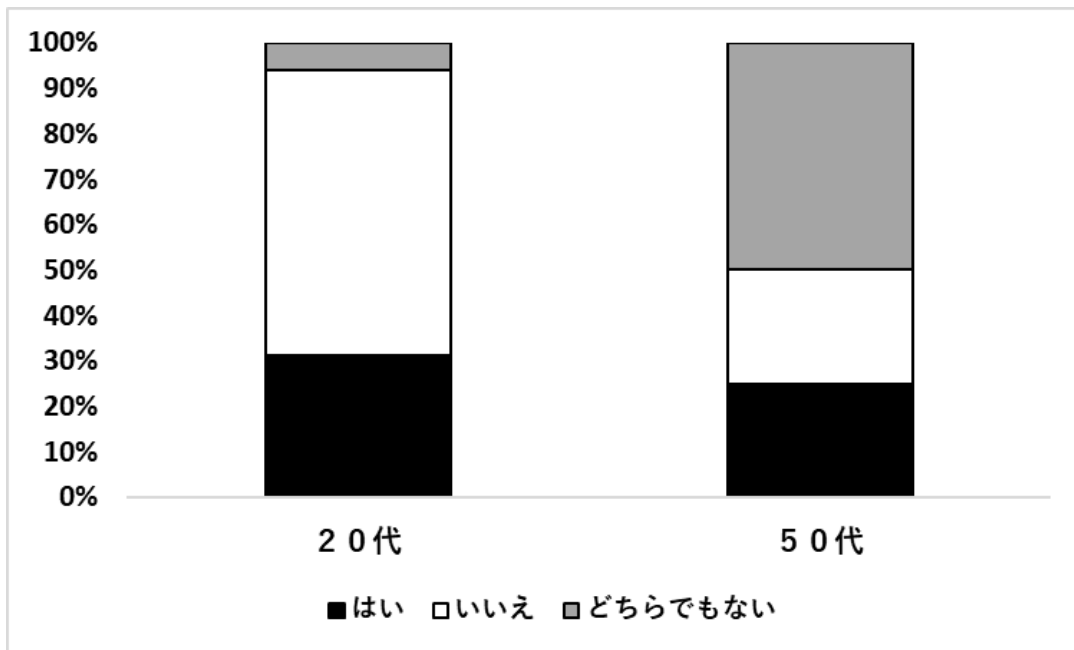


■ はい ■ いいえ ■ どちらでもない

■ はい ■ いいえ ■ どちらでもない

興味深いことに、女性より男性の方が男女が平等でないと感じている人が多かった。

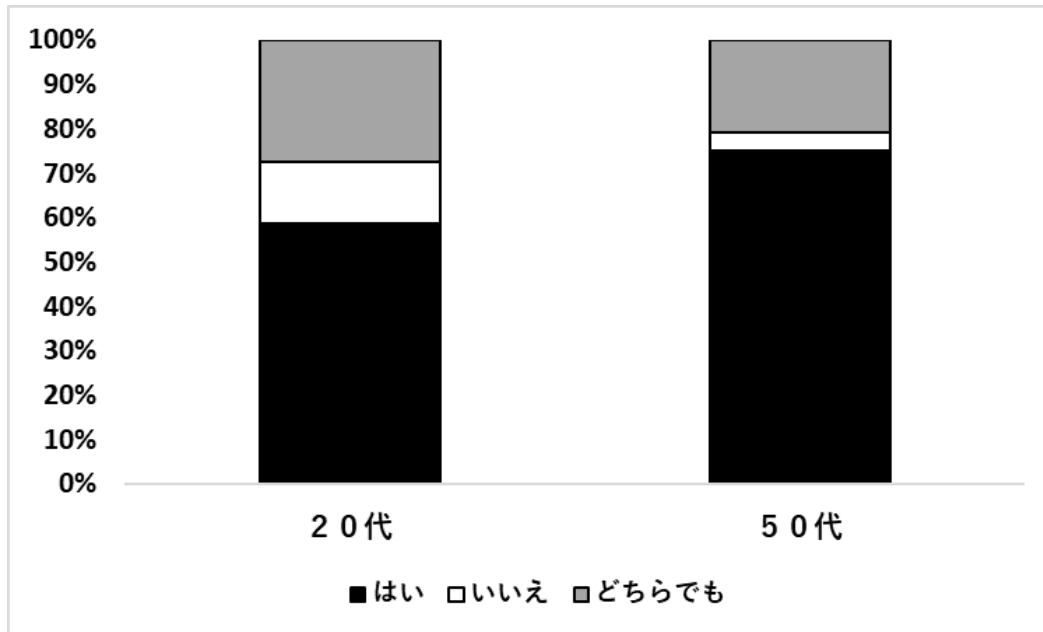
男女は平等だと思うか(年代ごと)



	20代	50代
はい	31.4	25.0
いいえ	62.7	25.0
どちらでもない	5.88	50.0

- 50代と比較して20代の方が男女は平等であると考えていなかった。

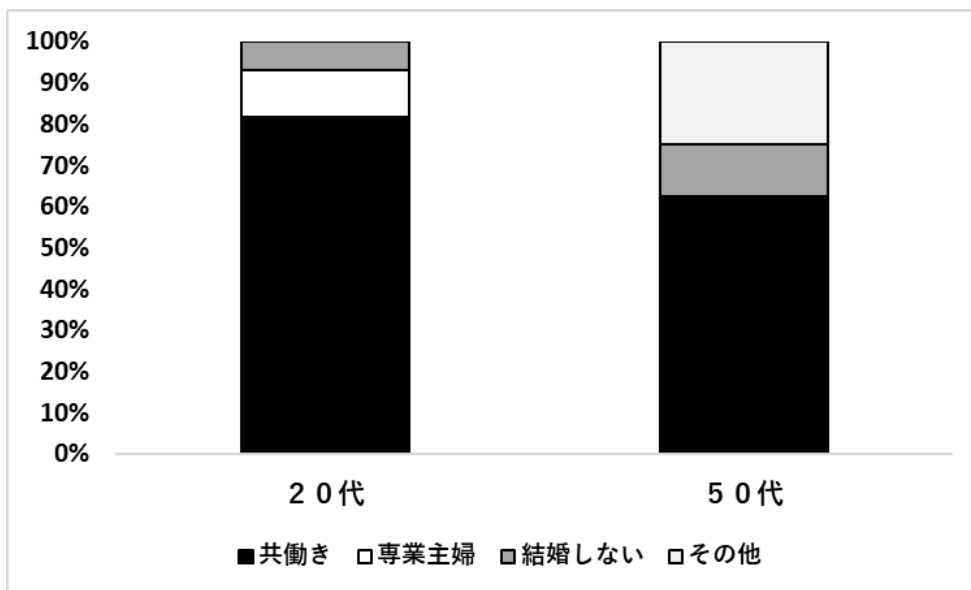
若い人はよりジェンダーギャップに寛容であるとかんじますか？



	20代	50代
はい	58.8	75
いいえ	13.7	4.17
どちらでもない	27.5	20.8

- 50代では20代と比較して自身より若い世代でジェンダーに対して寛容であると考えている
- この結果からジェンダーギャップに対する理解が近年進んでいる事がわかれると考える。

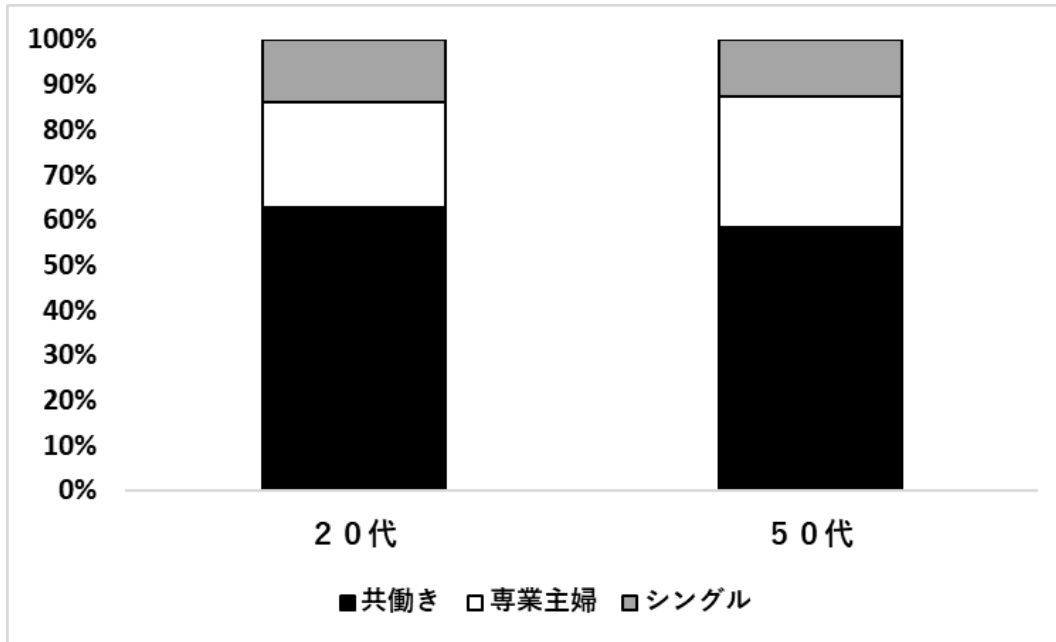
どの様な家庭を望みますか



	20代	50代
共働き	70.6	62.5
専業主婦	9.80	0.00
結婚しない	5.88	12.5
その他	0.00	25.0

- 育った家庭の割合は大きく差がなかったが理想としている家庭については差が生じた。
- また、50代ではその他としてパートナーの意思を尊重するという意見が多く見られた。

どの様な家庭で育ちましたか

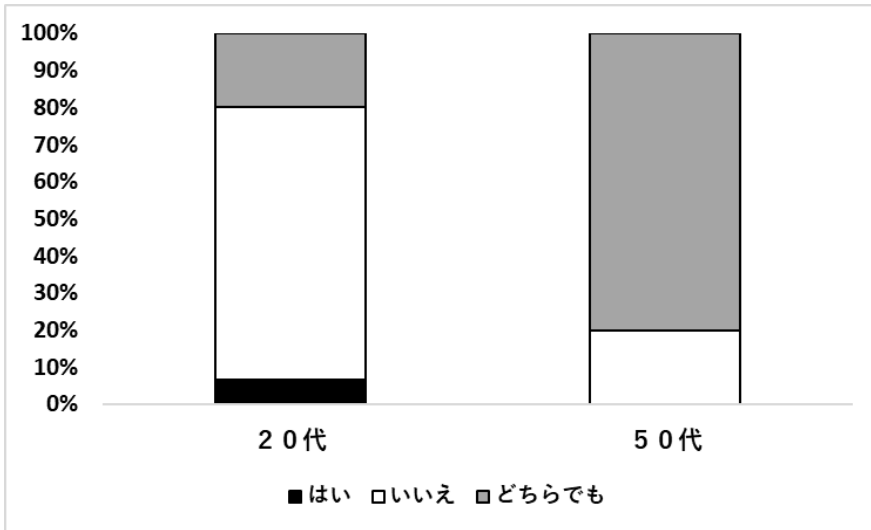


	20代	50代
共働き	62.7	58.3
専業主婦	23.5	29.2
シングル	13.7	12.5

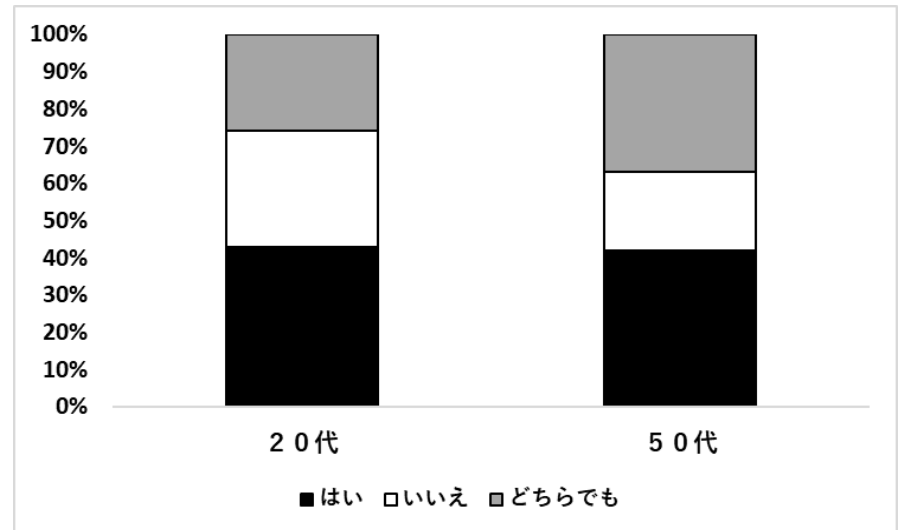
- 世代間で育った家庭が異なると考えていたが、大きく差がないことがわかった。

生きづらさの男女比較

男性は女性よりも生きづらいと感じますか



女性は男性よりも生きづらいと感じますか

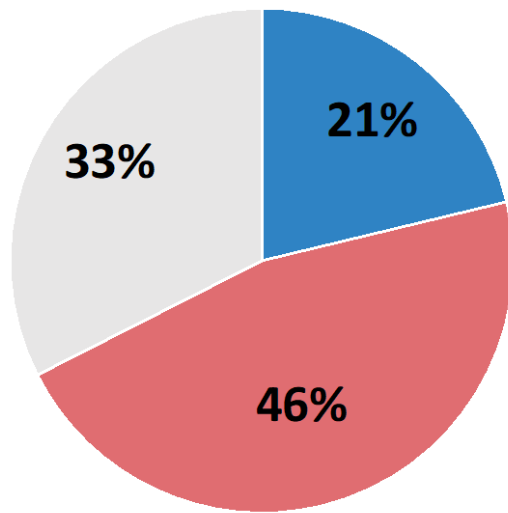


	20代	50代
はい	1.96	0.00
いいえ	21.6	4.17
どちらでもない	5.88	16.7

	20代	50代
はい	29.4	33.3
いいえ	21.6	16.7
どちらでもない	17.6	29.2

生きづらいのはどちらなのか？

どちらの方が生きづらいか



■ 男性 ■ 女性 ■ どちらでもない

全体的に女性の方が男性より生きづらいと考えている人が多かった。どちらでもない人が1/3を占めており、男性も女性も生きづらいことがあるということがわかる。

具体的な生きづらさについて

- 共働き夫婦であるが、夫はあくまで育児を手伝うとの姿勢で、妻と対等な立場で育児を行っていなかった。妻の負担が大きく、仕事との両立に困難を感じることも多いが、それを夫に理解してもらうこともできず生きづらさを感じた。
- 給料が一番の不平等だと思う。
- 女なんだから浪人せずどこかの大学に入れ、院への進学はする必要がないと言われてたり、4年制以外は許されなかった。
- 仕事で口紅をつけなさいと言われてた。

男性である事による生きづらさについて

- 男の子が人前で泣いてはいけない
- 痴漢などの性被害で女の人が虚偽の発言することもある。
- デートで男性がお金を多く負担したり女性をリードすべきという風潮
- 育児休暇が取りにくい

などの意見がアンケートから得られた。

アンケート結果をもとに ジェンダーについて考える

女性目線の生きづらさを主軸にしてスライドを作成している為、
男性の生きづらさについて言及するスライドが今後少ないと考える。
女性の生きづらさの前にまず男性の生きづらさについて考える。

男性の生きづらさについて男性
に向けられる偏見から考える。

男性の生きづらさについて①

「男らしさ」の風潮はどこからきたのだろうか？

鎌倉時代から江戸時代には、武士による支配へと切り替わり、支配の正統性が「武力」になる。その中で「戦う男」「**泣かない男**」へと賛美が集まるようになった。

明治時代以降、日本で富国強兵策がとられるようになると、男子は徴兵検査を受けるようになり、兵隊こそが男子の理想とされるようになる。そして、戦後復興期には「経済戦争」という言葉が使われるようになり、男は「**企業戦士**」として国のため、会社のため、家族のために、命がけで働くことになる。このように時代によって、求められる「男らしさ」は変化してきた。*

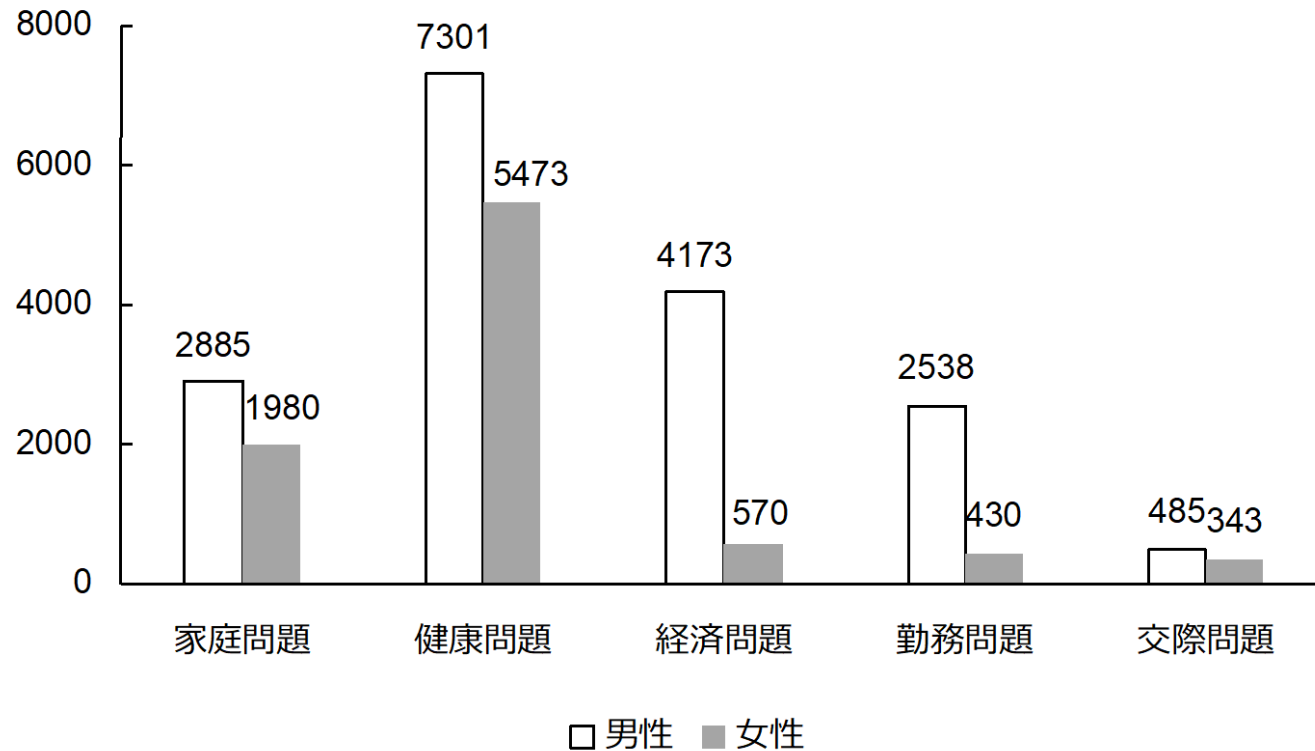
今でも男性は働くべきであるという思考が強いことや、妊娠～乳児までは男性は母乳が出ないためすることがないと思われがちであり、育児休暇が取得しにくいという現状があると考えられる。



* 「男らしさ」って何？どこから来た？【みんなに関わる「男性性」のはなし。イベントレポート
<https://ideasforgood.jp/2020/10/13/masculinity-event-report>

男性の生きづらさについて②

原因別の自殺者数



親の出費について

case①

母(理学療法士)

食費

雑費

私の学費・生活費・年金

父(会社員)

税金

弟の学費・生活費・年金

車

通信費

光熱

遊び

case②

母(会社員)

食費

父(会社経営者)

税金

学費・年金(それぞれ子供2人分)

車

水道代・光熱費

旅費等

①の家は同じくらいの出費であるが
②の家では父親の出費が圧倒的に多い！

男性の生きづらさについて

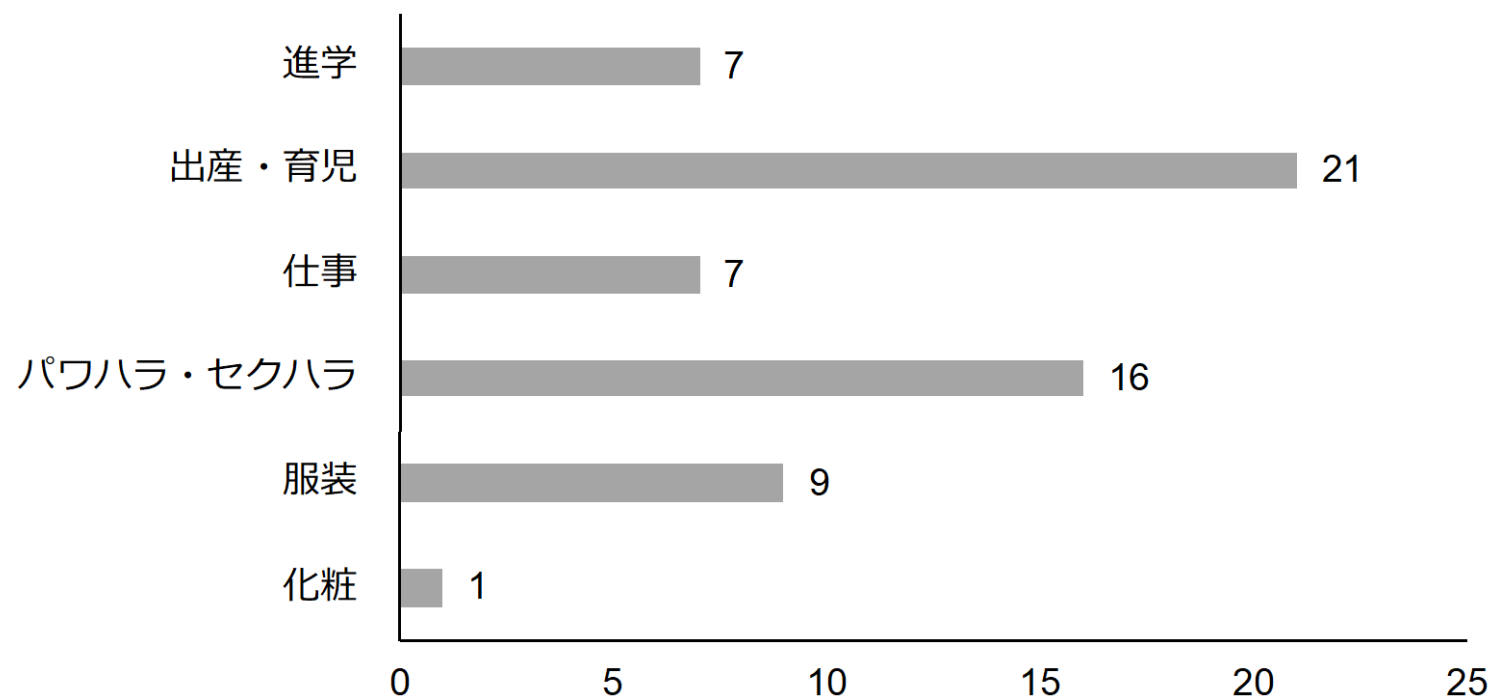
- 原因別の自殺者数を見てみると男性の自殺原因として女性よりも大きい物として**経済・生活問題、勤務問題**が挙げられている。
- 親の出費比較でもわかるように、父親の出費は圧倒的に大きいので、**経済問題は深刻である**と考えられる。
- 佐野優子さんの話の中でもあったがこの結果から**男性の働き方にも無理がある**のではないかと考える。
- また、男性は女性より多く稼ぐべき等という固定観念が**男性を苦しめる**事に繋がるのではないかと考える。
- 男女共同参画白書によると男性が勤務時間を減らしにくい理由として最も多い理由は仕事量が多く仕事・業務が終わらないであった**仕事の効率化、必要のない業務や接待をなくす**事で多くの方がより仕事をしやすくなるのではないかと考える。

アンケート結果をもとに
女性の生きづらさについて考える

生きづらさについて①

アンケートより

女性の生きづらさ

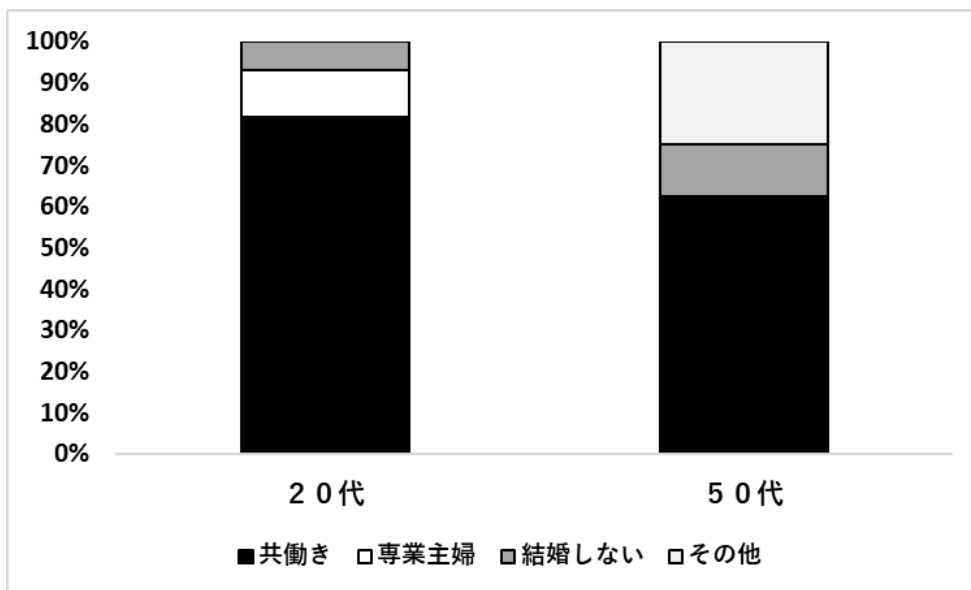


家事の偏り・出産・育児、母
になる事によるキャリアへの
影響について考える

問.

共働き世帯を望む人が増えているが、家事負担等の分担について変化があるのだろうか

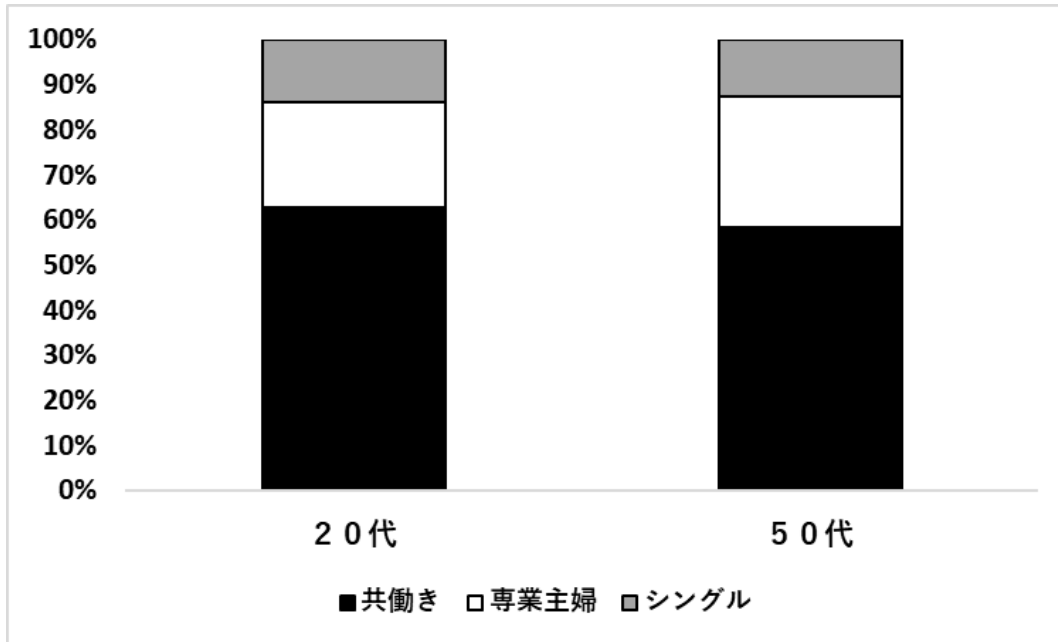
どの様な家庭を望みますか



	20代	50代
共働き	70.6	62.5
専業主婦	9.80	0.00
結婚しない	5.88	12.5
その他	0.00	25.0

- 育った家庭の割合は大きく差がなかったが理想としている家庭については差が生じた。
- また、50代ではその他としてパートナーの意思を尊重するという意見が多く見られた。

どの様な家庭で育ちましたか

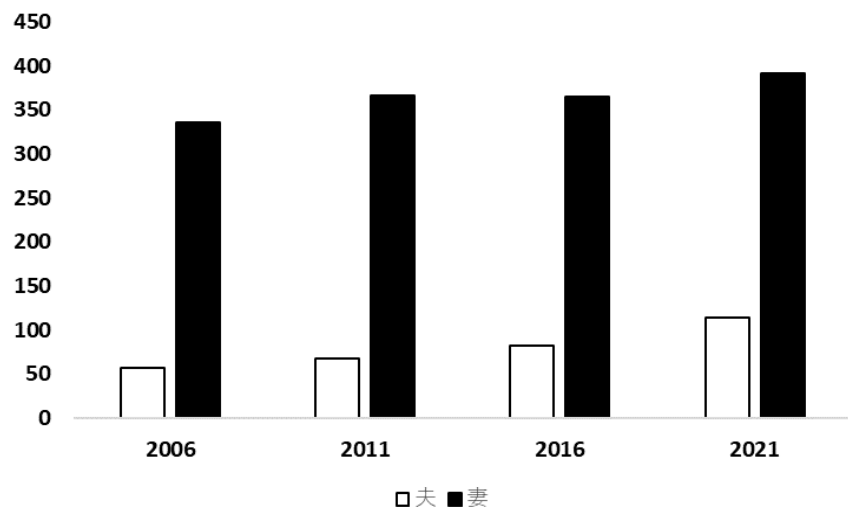


	20代	50代
共働き	62.7	58.3
専業主婦	23.5	29.2
シングル	13.7	12.5

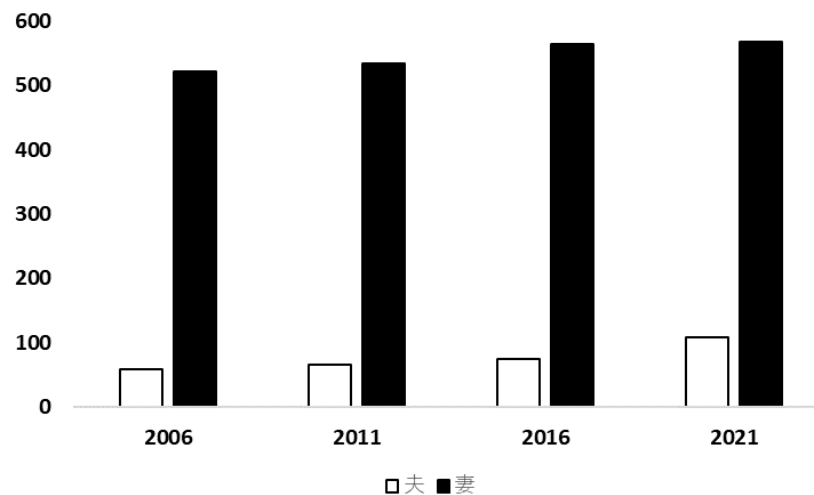
- 世代間で育った家庭が異なると考えていたが、大きく差がないことがわかった。

家事負担(無償労働時間について)

令和5年版男女共同参画白書
6歳未満の子供を持つ妻・夫の家事関連時間について



共働き世帯



専業主婦

	夫	妻
2006	57	336
2011	68	366
2016	82	365
2021	114	391

	夫	妻
2006	58	521
2011	66	534
2016	74	564
2021	108	567

家事負担(無償労働時間について)

- 共働き世帯は男女ともにフルタイムの仕事を行っているにもかかわらず**家事負担が女性のみ**に偏っている事がわかった。
- 女性の家事関連時間はたしかに専業主婦家庭と比較して約2時間減少しているが、問題は**男性の家事関連時間が専業主婦家庭とほとんど同じ**事である。
- 無償労働は有償労働と比較して価値が低い、誰にでもできる事であると男性は考えているかもしれない。
- そうであるならば(簡単にできる事ならば)自身が妻のかわりに行うと考える事はなぜしないのだろうか
- 家庭の環境を整え、家族の健康を維持する事は尊く、家庭の中で誰もが担うべき役割である。
- **無償労働の尊厳を高めるもしくは男性が無償労働を更に担う事が大切**であると考える。

出産・育児について



出産・育児休暇について
親から・・・

以前は女性が育休を取り、会社にいない間はその仕事をほかの人がやらなくてはならないため、ほかの人の仕事が増えてしまうことから、**妊娠したら仕事を辞めなくてはならない人が多かった。**

佐野さんから・・・

今は育休をとって仕事は新しい人材に任せる。仕事を辞められてしまったらもう一度人材を育成しなくてはならなくなるため、会社の負担も大きい。**育休から戻ってきた女性は視野も広がっているため、頼もしくなって帰ってくる。**その際には頼もしい人材が2人になっているため、会社としてもうれしいので、育休制度が充実している会社が多い。

今では**男性の育児休暇が整備**されており、男性にも育児の大変さを一緒に感じてもらえるようになっている。

出産・育児について

- 出産育児に対する選択を女性、家庭がする事ができるようになった事が変化としてあると考える。
- 出産・育児は男女双方の関わりが大切であるという考え方が主流となったと考える。
- 一方で男性からのサポート、**一緒に育てるという意識が薄い事**が女性からのアンケートから読み取れる。
- サポートするとはどういうことか、一緒に子育てを行うという意識を生むためにはどのようにアプローチをするべきであろうか。
- 少子化を求めた家族と女性のリアリティより、母親像を女性に示す重要性に対して言及されていたが、**男性に関してもこれから求められる父親像を示す必要があるのではないか**

親業務の偏りについて(育児)

case①

母(理学療法士)

- 普段の生活を整える
- 話し相手になる
- 宿題の相談相手

父(会社員)

- 偶に旅行等で運転
- 週に1回くらい子供と遊ぶ
- 工作等

量的な偏りはあまりないが、
時間的には母親の方が大変！！

case②

母(会社員)

- 送迎
- 宿題の相談
- お弁当
- 面談
- 部活の広報

父(会社員)

- 夏休みの自由研究
- 教材の購入
- 旅行の運転
- 自転車の修理

マミートラックについて

令和5年度男女共同参画白書p32-34より

マミートラックとは就業継続することはできても、出産や育児を機にキャリアが停滞してしまい、思うように活躍できないことがある。

マミートラックから脱出できた原因としては定時退社だけでなく、必要な時は残業できるようにした、時短をやめてフルタイムで働けるようにした、上司からの働きかけがあったなどが示されていた。

佐野さんの話では、産後は3年続くとあった。このように産後の体調不良などに対して、個人に対応して働き方を考える必要がある。

また、個人でも自身の体調不良や育児にかかる時間等についてより深く理解し、会社や社会などに対して意見を述べることができるようになる必要があると考えられる。

親業務の偏りについて(家事)

case①

母(理学療法士)

- 炊事(お弁当も含む)
- 洗濯
- 猫の世話
- 掃除全般

父(会社員)

- 洗濯(アイロンがけまではしない)
- お風呂掃除
- 掃除(掃除機をかけるだけ)
- ペット(猫、金魚、メダカ)の世話

case②

母(会社員)

- 炊事
- 洗濯
- 洗い物
- 掃除全般

父(会社員)

- ペットの世話のみ

両方の家と比較しても
家事の大部分は
母親が行っていることがわかる！！

探求活動2

-より深い考察へ-

女性の仕事について

女性の昇進について考える
制度として専業主婦家庭を優遇している部分があるため
この点について考える

仕事について①



佐藤さんから・・・

仕事の評価に女性であるというバイアスがかかっているように感じた。

女性の管理職の割合は12.7%と依然として低い(世界133位)。女性は評価されない。育児休暇などを取得することにより人事評価が下がるなどが挙げられる。

就職

女性の営業職の割合は17%と低く、まだまだ男性の多い職場である。

営業職の女性が少ない理由として、出張・転勤が挙げられる。

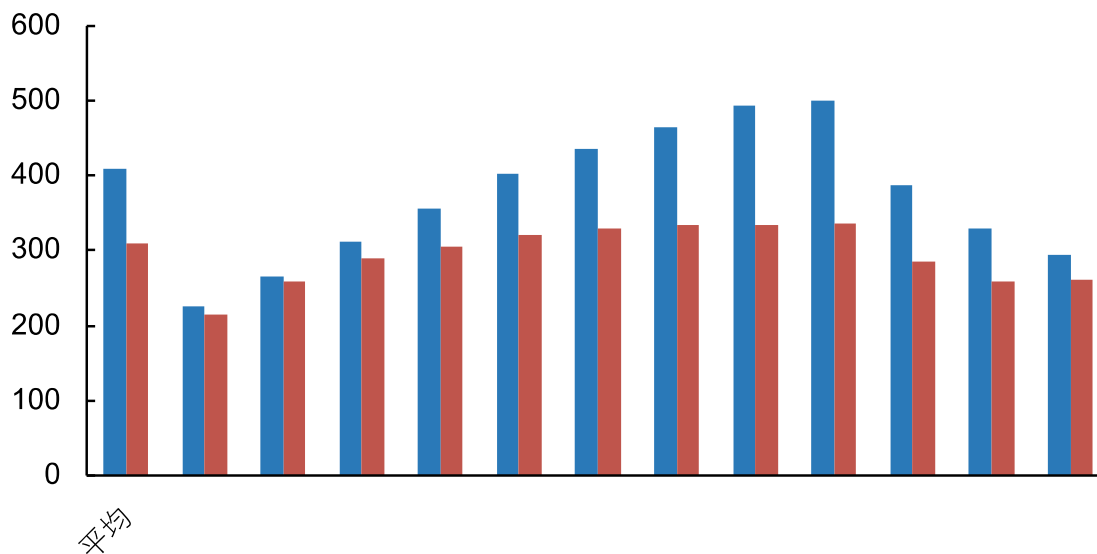
出張で不在にしていると家事や育児ができなくなるため、女性は出張ができないと思われてしまうからである。

これは家事や育児は女性がやるものであるという認識があるためであると考えられる。

仕事について②

給料について

令和4年賃金構造基本統計調査より、一般労働者の年齢別平均年収(賞与を除く)を計算した。結果が以下の通りである。



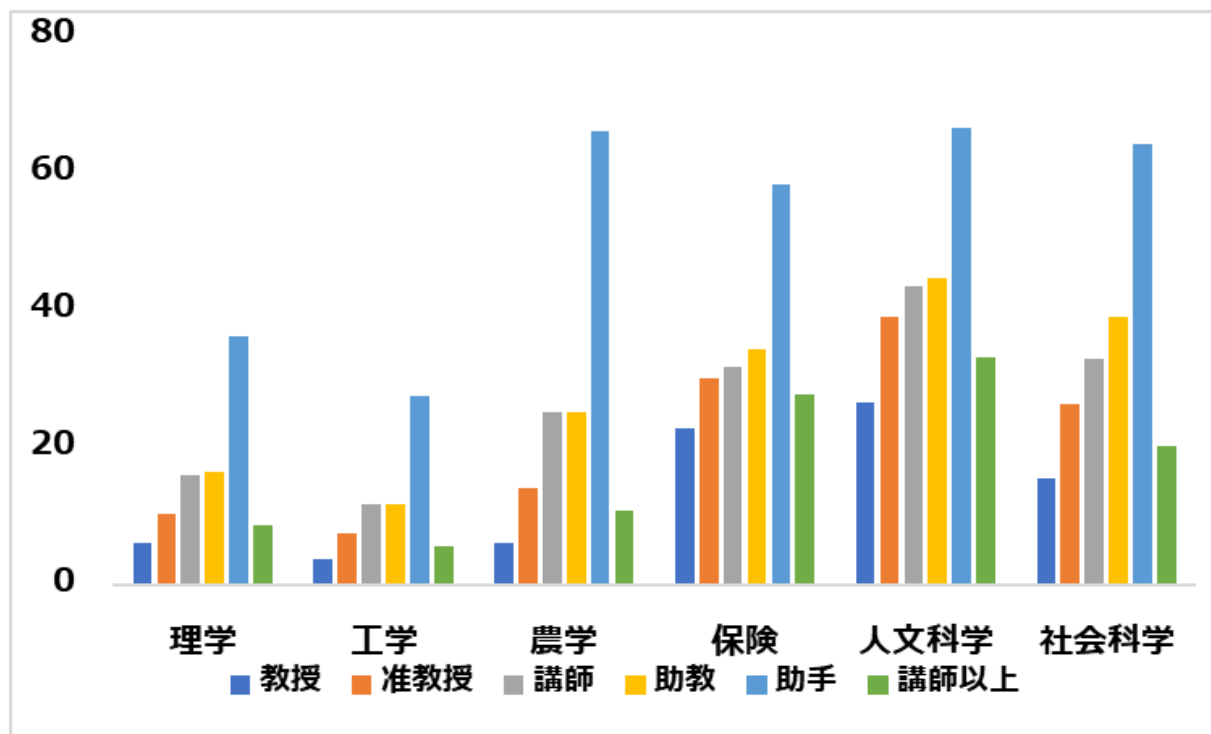
仕事について③

年齢が上がるにつれ男女差が大きく開いていき、50代で150万円以上の差がある。100万円上がるだけでより余裕を持った生活ができるのでこの**差は大きい**と考えられる。

一般的にはある程度までは勤続年数が長いほど年収が多くなる。女性は出産による退職で勤続年数に差が出ることもある。また、管理職に昇格することで給料が上がるので給与の差はあるはずであると思われがちである。しかし、出産によって勤続年数が減ってしまうことや女性の管理職の登用は会社の仕組みによるものであるので、**福利厚生を充実させ、出産による退職をなくし、女性の管理職への登用を積極的に行う**ことで賃金格差ををなくすべきであると考ええる。

賃金格差がなくなることで、**男性が家庭を支えるべきである**という考えもなくなるのではないかと考えられる。

仕事について(大学教員の昇進に関して)



左図は令和5年度版男女共同参画白書4-2図大学などにおける専門分野別教員の女性の割合である。この図から女性が昇進する事ができる分野に偏りがある事がわかる。

また、助教の女性割合が50%を超えている学問領域が4つあるが教授等の割合を見るとどの分野でも女性の割合は3割を超えない。大学での昇進制度や研究者として女性の活躍を妨げる様な制度になっている事を疑わざるを得ない結果であると考えられる。

3号被保険者について

3号被保険者は第2号被保険者(※)に扶養されている配偶者の方で、原則として年収が130万円未満の20歳以上60歳未満の人である。

専業主婦やパートタイムで働く人が該当する。

※第2号被保険者

厚生年金保険や共済組合等に参加している会社員や公務員の人。

ただし、65歳以上の老齢基礎年金などを受ける権利を有している人は除く。

3号被保険者について

- そもそも3号被保険者とされている方たちに対しては認めるべきであるという立場を取る。
- 介護や自身の体調不良等様々な事情で扶養家族となっている人に対して必要な制度であると考えている。
- 今回考える制度の問題はパート・専業主婦に関してである。

次のスライドに3号保険に加入しているパート・専業主婦が多く存在する事による不利益とその原因、解決策について考察する。

パートタイムで働く女性について

- 人口減少時代の家族・学校・地域・社会の7章には女性の3号被保険者は非就業者(専業主婦)とパート(年収が103万円以下または130万円以下の人達)に大別されると示されている。
- パートタイムで働いたり専業主婦である人の分の国民年金を2号被保険者が支払っている事がわかった。
- 問題はパートタイム、**専業主婦の女性を扶養している者の給料に関わらず2号被保険者が年金を負担しているという事が挙げられる。**
- 様々な原因による扶養者との離別後女性が貧困に陥るという問題点も挙げられている。
- また、**企業は3号被保険者分の保険料を支払う必要が無く、個人としても扶養から外れる事により支払う税金が多くなる事を避けるためにパートタイムでの就業体系を受け入れている人が多く居る事がわかった。**

女性の仕事について まとめ

- 女性の仕事に対して、出産、育児の過程の中で、女性がキャリアを積む事が難しくなっている事がわかった。
- 女性が自身の望むキャリアを手に入れるためには社会の認識の変化のみではなく女性のキャリアを支援するような社会制度の変化も必要になると考えた。

女性の進学について考察を行った

- ・ 女性の高学歴化が未婚化の原因である
 - ・ 女性が大学院に行く必要は無い
- 等の意見をアンケートや文献で見つけた為

進学について



日本ではまだ「**女子に教育は必要ない**」「**女子が教育を受けると結婚できない**」といった**観念**が根強く残っている。日本で女子教育が促進されない裏で、ジェンダー平等を凌駕する重大な社会問題も起こっている。

近年**シングルマザーの貧困の深刻さが取り上げられるようになってきた**。日本のシングルマザーの労働参加率は先進国でも高い方に位置されるにも拘わらず、彼女たちの多くは貧困に直面している。これには、共同親権の欠如と養育費の不払い、貧弱な就学前教育システム、雇用制度など様々な要因が背景にある。そしてその一つに彼女たちの低い教育水準があることが指摘されている。教育水準が低いということは、時間当たりの高い賃金が見込めず、長時間労働をしたとしてもその合計収入には限界がある。

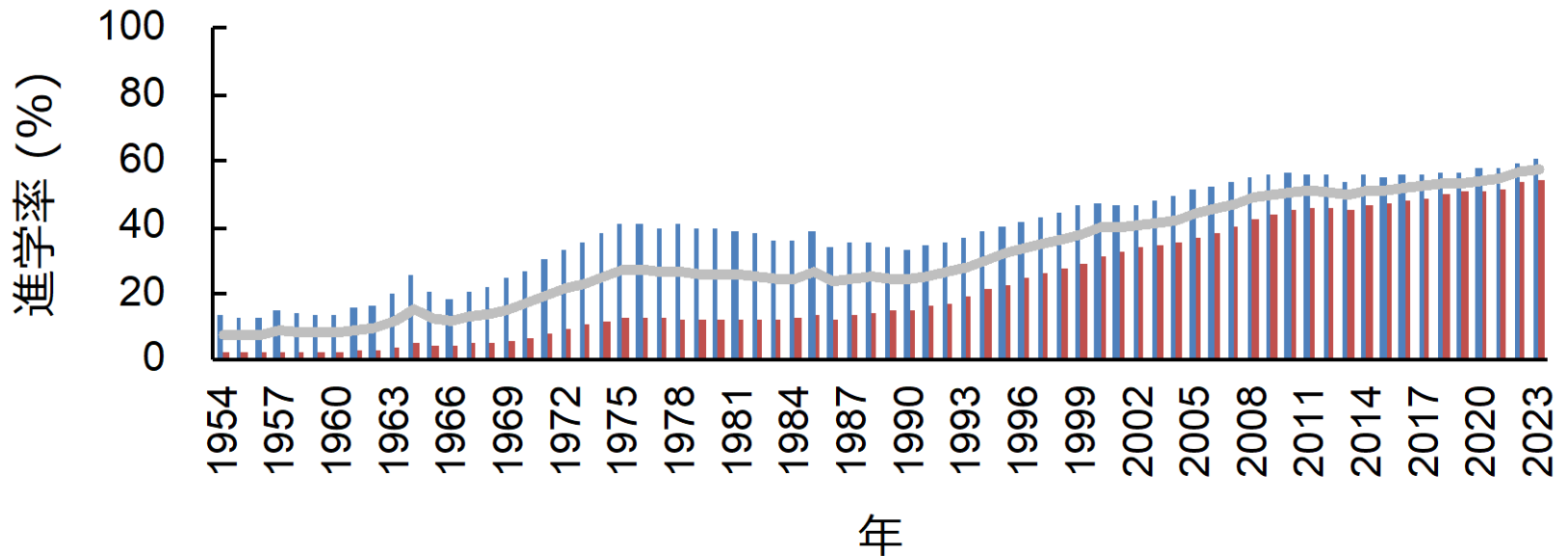
現在日本で3組に1組の夫婦は離婚をされると言われている。このまま離婚率が高止まりするのであれば、「女子に教育は必要ない」という考えは自身の娘を貧困へと導く可能性の高いものとなる。さらに、**貧困のシングルマザー**ということは、**その子供も貧困に陥っているわけで、すなわち孫も貧困状態に陥る可能性が高い**。*

女性の貧困が問題になっているのは進学をしていないことが挙げられる。

*日本の女性は先進国で最も学歴が低い？ 女性と子供の貧困を生み出す日本の女子教育
<https://wezz-y.com/archives/34292>

大学進学率について

4年制大学の進学率



■ 男性 ■ 女性 — 全体

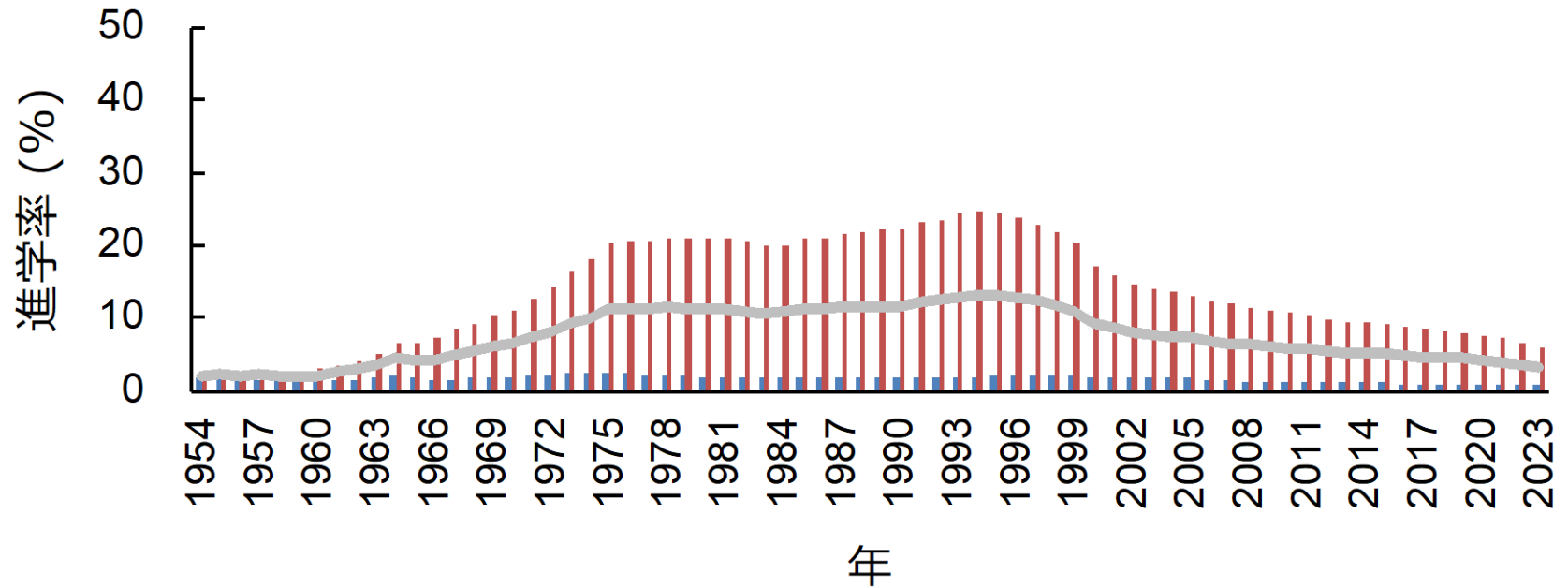
女性の4年制大学への進学率は年々上がってきており、現在ではほぼ同じ割合となっている。

学校基本調査結果の概要

https://www.mext.go.jp/content/20230823-mxt_chousa01-000031377_001.pdf

大学進学率について

短期大学の進学率



■ 男性 ■ 女性 — 全体

男性の割合が低く、女性の割合が1970年～2000年までが多い。

短期大学の位置付け

短期大学は大学の枠内に存在するが4年制大学とは目的と修業年数の違いがある。

学校教育法（昭和22年法律第26号）

大学

第八十三条

- 1 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。
- 2 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

短期大学

- 1 第百八条 大学は、第八十三条第一項に規定する目的に代えて、深く専門の学芸を教授研究し、**職業又は實際生活に必要な能力を育成すること**を主な目的とすることができる。
- 2 前項に規定する目的をその目的とする大学は、第八十七条第一項の規定にかかわらずその修業年限を二年又は三年とする。

参考：短期大学に関するよくある質問について-文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/tandai/1318917.htm

大学院進学率

- 大学(学部)卒業後、大学院へ進学する者の割合は、2020年度では女子5.6%、男子14.2%となっており、男女とも2010年女子7.1%、男子17.4%以降低下傾向にある。
- 文部科学省「学校基本統計」によると、2020年度における高等教育段階の女子学生の割合は、大学(学部)45.5%、大学院(修士課程)で31.8%、大学院(博士課程)で34.0%となっている。

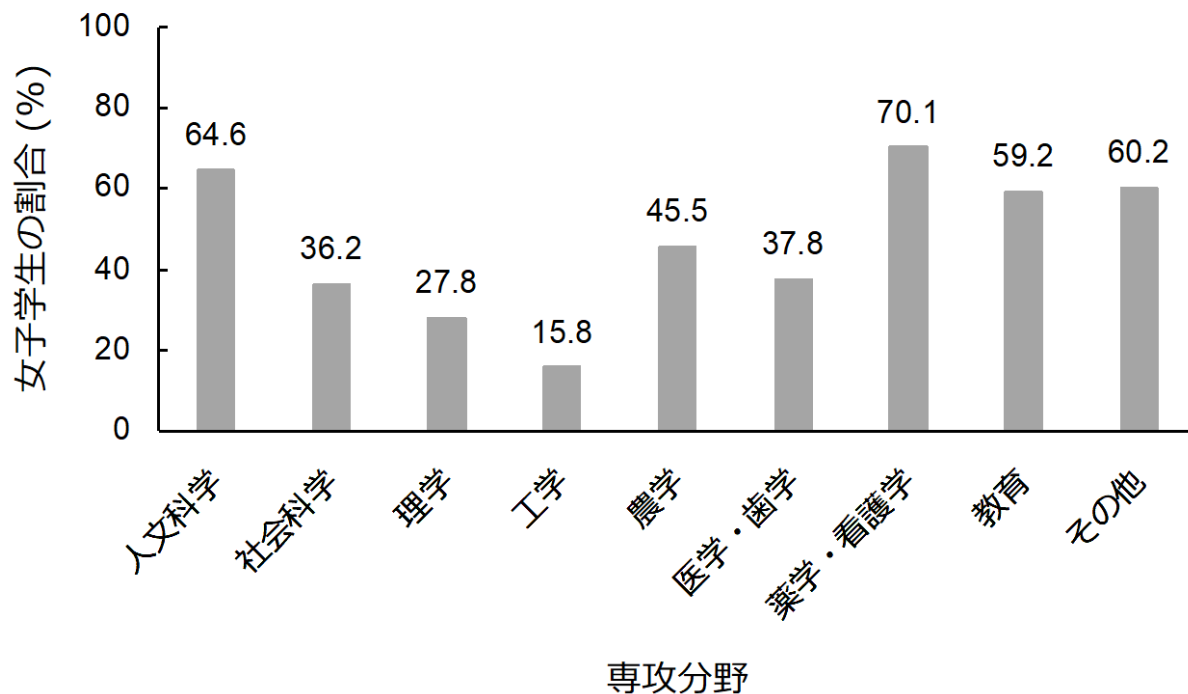
大学院に進学する女子学生の割合は低くなっている。

なぜ男女で進学状況に差があるのか

大学とは違い、短期大学は実際の生活に必要な能力の育成を行う。学科には栄養学などの家政学や幼児教育などの教育学などが多い。

女性は家で家事や育児をするものであるという風潮があり、そのための知識を育成するために女性は大学ではなく、短期大学に行く人が多く、男性は社会に貢献するべきだという考えから、短期大学の割合が少なく、大学への進学が多いと考えられる。

専攻分野の男女差について



工学・理学分野は女子学生の割合が高く、人文科学・薬学・看護学分野は女子学生の割合が高い。

薬剤師が女性に人気である理由は出産や育児などの離職からの復帰がしやすいことが挙げられる。

女性の結婚について

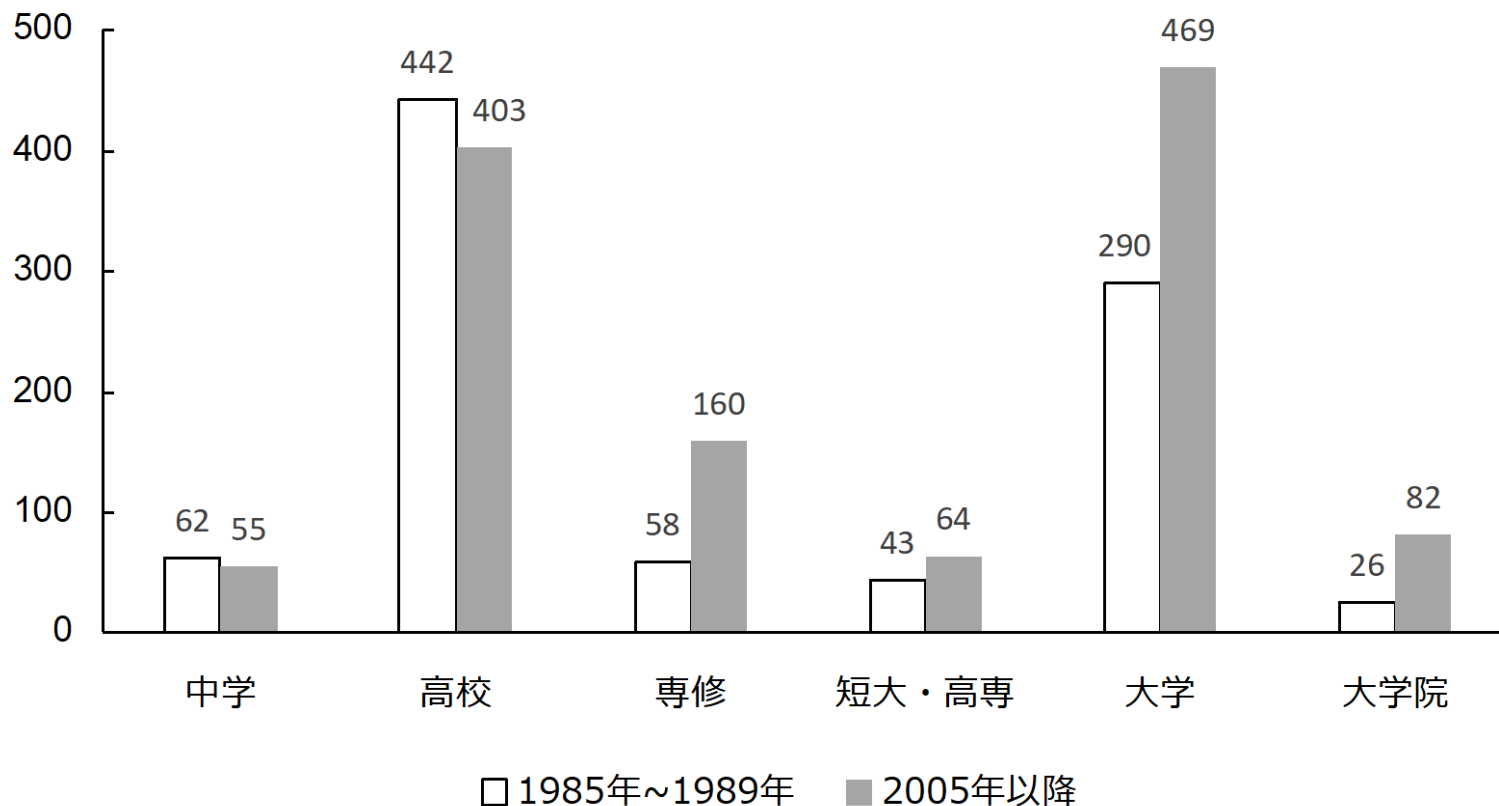
学歴と結婚

年々女性の未婚率が上昇し話題となっている。未婚率と共に女性の高学歴化が進んでいるため、未婚率の上昇は高学歴化に起因するものとされている。先のスライドに述べたように女子教育が不要であるという風潮がシングルマザーの貧困の原因となりうるのでもし高学歴化が未婚率の上昇になるのならば女性の生きづらさは解消できないのではないか。

果たして本当に女性の高学歴化が未婚率の上昇の理由になるのだろうか？

既婚男性の学歴

妻の年齢が 50 歳未満の夫婦を対象とした全国標本調査

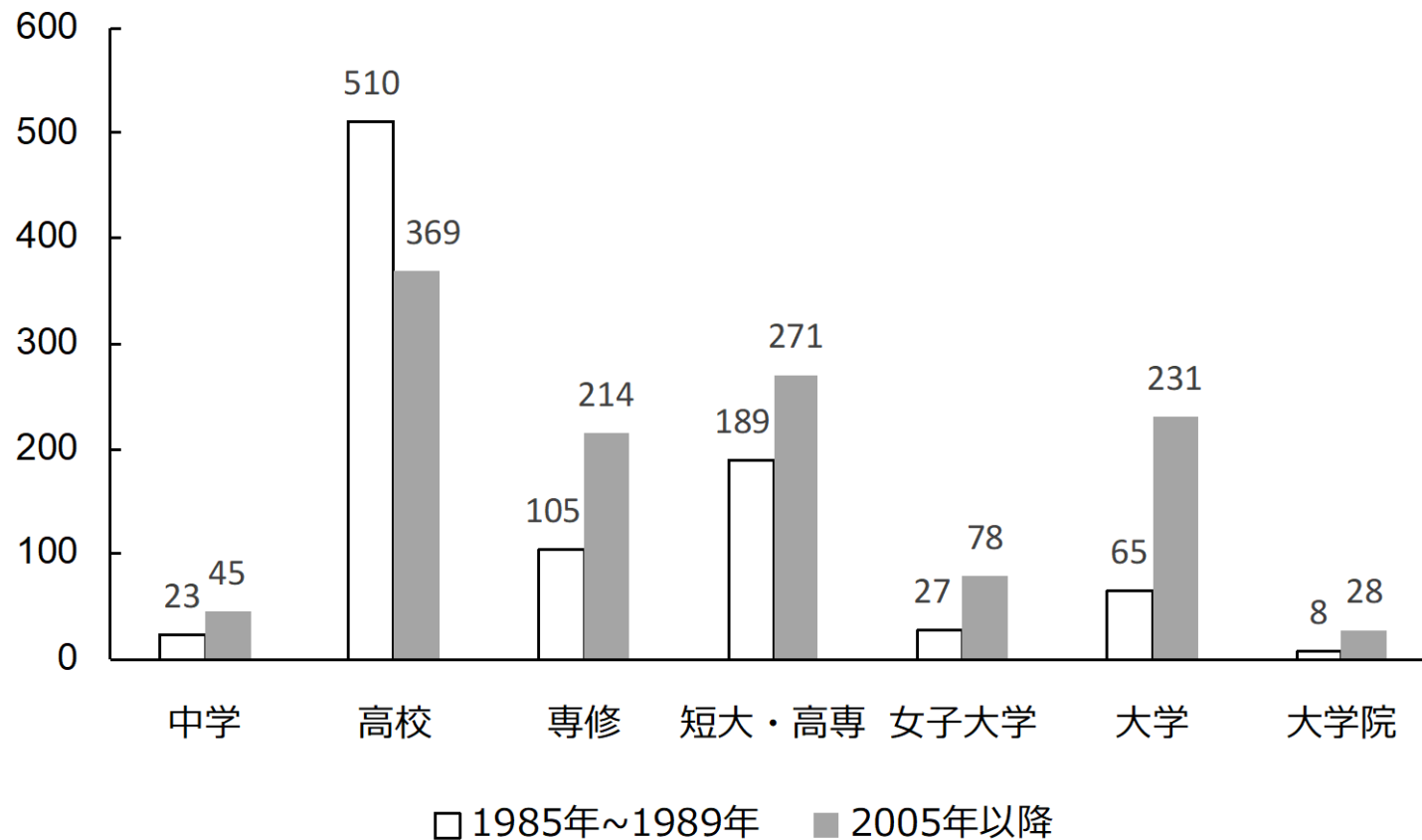


国立社会保障・人口問題研究所 第14回調査より

https://www.ipss.go.jp/site-ad/index_Japanese/shussho-index.html

既婚女性の学歴

妻の年齢が 50 歳未満の夫婦を対象とした全国標本調査



国立社会保障・人口問題研究所 第14回調査より

https://www.ipss.go.jp/site-ad/index_Japanese/shussho-index.html

未婚化の原因とは？

p 81、82から、男女ともに学歴は高学歴になってきている。高卒既婚女性の人数は減少していることからわかるように、少子化の原因である**女性の高学歴であることが未婚率の上昇となることは考えにくい。**

未婚化の原因は女性が高学歴になったことが原因なのではなく、高学歴の女性が社会で活躍しながら子供を産むことが負担にならないような社会体制がまだできていないからである。したがって、**社会が女性のキャリアと出産の両立ができるようなサポート体制が必要**である。

未婚女性は不幸せか

未婚化する日本を読んで

- 日本では学歴の高い女性の未婚化が進んでいると示されていた。これは共働きを求められている社会の中で、**家事の負担がまだ女性に大きくかかっている為**であると私は考える。
- 未婚化する日本の中では女性が家事や育児を行うべきであると自身で結婚に対して制限をかけていると示されていたが、男性は女性が働く社会の中で、今まで通り仕事を行った上で、**家事の負担も**になってくれるのだろうか。
- 高学歴女性の未婚化は女性だけの問題ではなく男性、社会の問題ではないのかと考える。

未婚女性は不幸せか 2

未婚化する日本を読んで

- そもそも未婚化は悪い事であるのだろうか。
- ある程度の貯蓄を持つ女性(男性も)が一人で生きる事に幸福感の低下が無いと考える。
- 実際に、離婚をする人が増えている世の中で、一概に全員に対して結婚をする事 = 幸せであるという価値観で話を進める事は理解が難しい。
- 自身の価値観に合い、今後の人生をともに歩む事ができると感じた人と一緒に居ることが大切であり、晩婚化等もしっかりと対人関係を精査していると考えると全く悪い事でないこれから結婚に対して判断をする私は考える。

服装や化粧について考える

服装・化粧について

女性は化粧しなくてはならないのはなぜだろうか、また、男性が化粧するのは変だという考え方があるのはなぜなのだろうか？

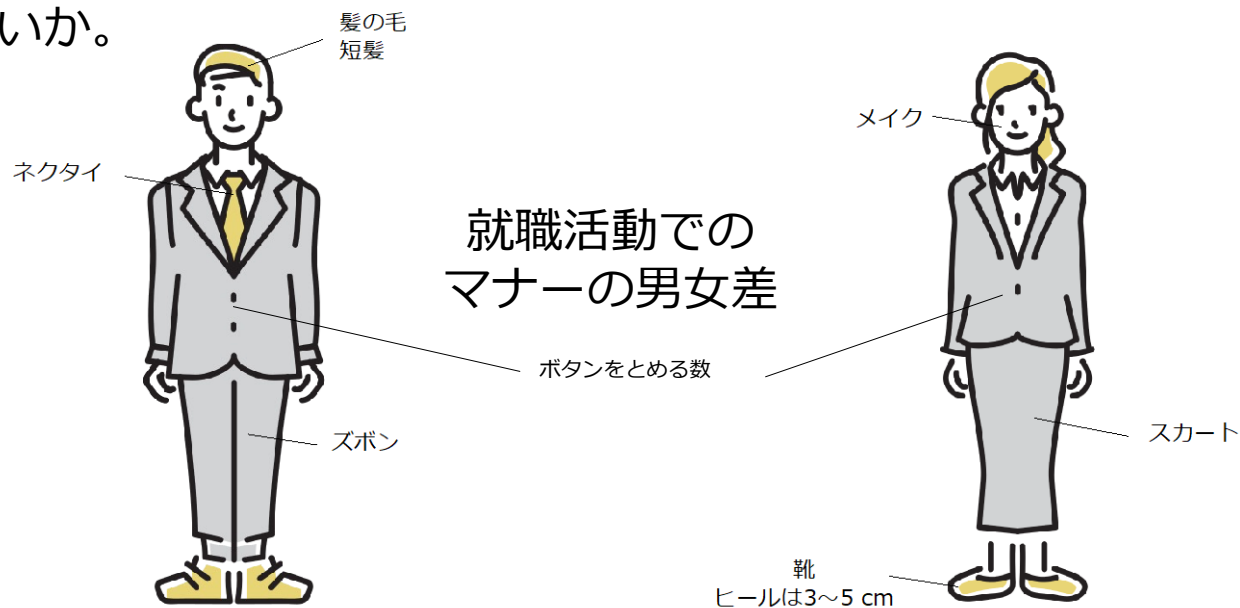
女性が化粧をするのは身だしなみで、していないのはだらしがなく見えるという記述があったが、男性もクマやシミなどを隠して身だしなみを整えることをしてもいいのではないか。近年ではK-POPなどの影響もあるのか、メンズメイクが若者を中心に流行しており、男女ともにメイクをするようになってきた。男女ともに化粧をする時代が到来するのも遠くないと考えられる。

服装・化粧について

スーツを買いに行った際に、就職活動ではほとんど全員スカートを履くからパンツスーツだと目立つと言われた。女性はスカートを履くという文化もなぜあるのだろうか。

女子の制服がズボンOKの高校があるので、就職活動でもパンツスーツの人が目立たないような風潮になって欲しい。

また、就職活動でのマナーも男女で差がある。スーツについて調べていくと「女性らしく着こなすことが重要」とさまざまなサイトに書いてある。**女性らしく・男性らしくを強要しているのは男女平等から遠ざかっているのではないか。**



服装・化粧について

- 男性、女性で服装を分ける必要について私は中学、高校の制服を着ている中でとても疑問に感じていた。スカートが嫌いであったわけではないが、冬になるとスカートは寒い。ズボンのほうがあたたかそうなのになぜわざわざスカートを履く必要があるのだろうかと考えていた。
- また、化粧に関して男性は化粧の面倒臭さや化粧品値段について多くを知らないにもかかわらず女性は**化粧をするべきである**という固定概念を持つ事には疑問を感じる。
- 我々は男性が素顔で居ても何も言わずに居るのに男性は素顔でいる私達を見て化粧をするべき(もっと顔をきれいにしろ)と言う事はとても不平等であると感じる。

服装・化粧について

- 女性として生きる中できれいで居る事を求められる点でストレスを感じる事もあるが、女性の方が男性と比較して自由な服装の選択をすることができると感じた。
- 女性がスカートを履いていても、ズボンを履いていても文句を言われる事は少ないが、男性がスカートを履いて外を出歩いていたら、不審な目で見られるだろう。
- 実際に私が持っているスーツはパンツタイプであるし、女子高生のなかにはスラックスを選択して履いていたりネクタイをしていたりする学生が居る。
- しかし、男子生徒でスカートを履いている生徒は見受けられない。
- 化粧についてもナチュラルではないメイクでは外を出歩くだけでも後ろ指をさされる様な感覚に陥るだろう
- **男性も女性も好きな格好をして、望む形で外出し、それを認めあえる様な社会がベストであると感じた。**

ジェンダー問題とはなんだろう



ジェンダーについて

アンケートより

男とか女とか 関係はない、ただ身体づくりなど 完全に平等にはできないと思っている。男性だから出来る事 女性だから出来る事 それを考慮したうえでそれぞれの役割を尊重した 未来になるといいなと思っている。

男女平等が実現するにはジェンダー教育が重要である。また、社会の中にも男女の役割に固執する世代がいるので、これから変わっていくにはまずは会社の上の立場である人が改革をしていく必要がある。

男女の差別と区別の違いを確認しながら今後平等について考えていきたい。

ジェンダーに対する新しい見方について

エマ・ワトソンUNWomen親善大使の国連でのスピーチより

- ジェンダー平等は男性の問題でもある
- 今日まで私の父の役割が軽んじられたのをこの目にしてきました。母親と同等に大切であるにもかかわらず
- **男性が固定観念から自由になれば女性にとっても自然に世界は変わる**
- 男性が男性として認められるために攻撃的になる必要がなくなれば女性も服従する必要がなくなる
- 男性が管理する必要がなければ女性が管理される事もない
- 男女ともに繊細で居る自由があり、男女ともに強く居る自由がある

社会制度や女性のみの問題なのか

- 社会制度が不平等ならば社会制度を変えればこの問題は解決をする。
- また、女性の働き方が問題であれば女性の就労を支援することで問題は解決する事ができる。
- しかし、現実にはそうではないと私は考える。
- 問題はより深刻で広いと考える。
- 女性はなぜ安い労働力として働かされるようになったのだろうか、女性はなぜ仕事の後に家事を行い食事を作ると考えられているのか。
- 男性はなぜ家庭を持っても早い時間に労働を終えないのか
- この様な問に答える事で問題が見えてくるのではないかと考える。

4. 私達の考えるジェンダーの未来

男女平等が進まない原因とは

- 共働き世帯の無償労働時間の差についての表 (p56)にある様に社会の変化、家庭の変化に対して生活の変化が伴っていないことが今回の調査を通してわかった。
- 男女平等を進める中で女性がこれまで担っていた負担や困難さを社会全体で少しずつ負担することになるが、その点に対する社会の理解不足が男女平等を妨げているのではないかと考える。
- 社会の理解は男性の意識改革のみでなく女性の意識の変化も必要であると考え

男女ともに幸せに生きるとは？

男、女ではなく自分として生きる

男女以外にも様々ある差別や偏見から自由になるもしくは他者を認める事のできる社会を実現する事が誰もが幸せに生きる事に繋がるのではないかと感じた。

男女ともに幸せに生きるために

育休の取得でもいまだにいい顔をしない人がいるように、法律や社会の変化はあれど今でも「男らしさ」「女らしさ」を求めている人がいる。

日本人は周りを気にする民族であるため、なかなか変化はしにくい。しかし、メンズメイクの広がりでもわかるように周りの人やインフルエンサーなどがするようになった、というような理由で今や多くの人々がメイクをするようになった。

「男らしさ」「女らしさ」も同様にして多くの人々がそれを気にしないといった変化をしていけば自然と日本全体で性別に囚われずに生きていくことが可能になると考えられる。

5. 「総合的な探究の時間」の モデル提示

単元全体のテーマについて

- 社会の変化・個人としての変化を自分目線・社会目線で考える。
- また、自身の所属している学校・家庭でどのような取り組みを行うことができるのかについて考える。
- 自身にある偏見、これまで受けていた偏見に気がつけるようになる。
- なぜジェンダーギャップが起きるのかについて考える。